舟橋未来ブリッジ 第 2 回会議 議事録

【日時】2026 年 10 月 27 日（火）17:00〜19:00（※第 2 回委員会）
【場所】舟橋村会館／ リアル、オンライン
【出席者】

- **特別委員**：渡辺村長（舟橋村長）
- **委員**：　岡田委員（株式会社ブリベンチャー 代表取締役）
  中川委員（株式会社ウオー 代表取締役）
  大石委員（農業 PR プランナー）
  中林委員（富山大学１年・ナカバヤシまちづくりラボ代表）※オンライン
- **事務局**：　堀井（北日本新聞社 未来創造室／進行）
  柵（北日本新聞社 未来創造室／記録）
  本間（舟橋村役場 総務課長）

会議次第

1. **開会・本日の進め方と前提共有**
2. **特別委員 挨拶**（渡辺村長）
3. **村の現状・地域資源と課題の共有（舟橋村マップ等の説明）**（本間総務課長）
4. **各委員からの事業アイデア発表（各約 10 分）**
5. **ディスカッション・今後の推進方向性の検討**
6. **今後のスケジュール・次回に向けた進め方**（12 月第 3 回会議に向けた計画策定）
7. **閉会挨拶**（渡辺村長）

会議録

1. 開会・本日の進め方と前提共有

柵（事務局）：本日は中林さんが急遽授業の関係でオンラインでの参加となります。よろしくお願いします。 それでは「舟橋未来ブリッジ」第 2 回会議を始めたいと思います。
堀井（事務局）：本日の進め方ですが、冒頭に村長から一言いただき、本日の進め方と前提の共有をさせていただきます。皆様本当にお忙しい中ありがとうございます。 本日は、事前に委員の皆様からいただいた事業案の発表を各 10 分程度行っていただき、それを元に議論を深めていきたいと考えております。今回の目的は「新事業開発」です。事前にいただいたアイデアも含めて村の皆様とも共有し、「こういう方向で次のステップに進もう」という前提を確認した上で、後半は約 40 分ほど議論を深める時間を取っています。 第 1 回は「舟橋村とはどんな地域か」「どんな可能性があるか」を自由に話し合っていただきましたが、今回はその次のステップとして、現実的な推進体制の確認や具体化に向けた足がかりにしていきたいと考えております。 それでは村長、冒頭のご挨拶をお願いいたします。

2. 特別委員（渡辺村長）ご挨拶

渡辺村長：改めまして、本日は第2回「舟橋未来ブリッジ」にご参加いただき、委員の皆様、大変お忙しいところありがとうございます。そして北日本新聞社様におかれましても、引き続きこのように舵取り・進行をしていただいていることに感謝申し上げます。 私事ではありますが、村長としての任期満了を迎え、無事この先4年間の村政を託されることとなりました。もちろんこのプロジェクトも、私がこの先4年間進めていく重要な施策の1つとして、改めて気を引き締めて進めてまいりたいと思っております。 第1回の委員会の場では、皆様から非常に活発で期待感しかないアイデアをたくさんいただきました。少し時間は経ちましたが、今なおその期待感は強く持っております。 少しタイトなスケジュールではありますが、中身を詰め、早期に具体化し、村としても皆様と一緒に実現できるよう進めてまいりたいと思います。本日の第2回委員会も最後までどうぞよろしくお願いいたします。

一同：よろしくお願いします。

3. 舟橋村の現状・地域資源と課題の共有

堀井（事務局）：それでは続いて、事前に堀井の方で整理した「舟橋村マップ」のメモについて、村にどんな資源や人がいるのか、現状と課題の共有を含めて説明をお願いします。

本間総務課長：はい、私から「舟橋村マップ」に沿って整理した内容をご説明します。 まず一番の特徴は、「日本で一番面積が小さい自治体（日本一小さな村）」という点です。全国的にも富山県全体でも人口減少が進む中、舟橋村は人口が増加傾向にあり、平均年齢も約44歳と働き盛り・子育て世代が中心の村です。 逆に言うと、平日の日中は村内に人がほとんどおらず、夕方になると親御さんが迎えに来るような環境です。かつて1,500人程度だった人口が、現在約3,300人まで増えています。 住民意識調査では、約85%の方が「村に愛着を持っている」と回答している一方、約7割の方が「村の中に気軽に行ける楽しい場所がない」と回答しています。 また、役場職員約30名で一般行政事務を行っており、規模が小さい分、基幹業務の1人当たりコストが高く、財政的にも非常に厳しい現状があります。そのため国の地方交付税や県の補助金に頼るだけでなく、ふるさと納税やNFTなどの取り組みで「外貨を稼ぐ」ことに渡辺村長を中心に挑戦しています。 また、組織が小さく機動力があるため、県内初の電子投票の実施や、将来的な自動運転バスの運行を見据えたコミュニティバスの実証などにも取り組んでいます。

キーマン・関係人口としては、地域おこし協力隊で3年目の「にしけん」さんが「ダオ（DAO）」などを切り口に関係人口を呼び込み、ひまわりイベントや子ども向けプロジェクトに関わっていただいています（来年度についても空き家を活用した民泊など新たなテーマも含めて隊員採用なども検討中）。また、国の「地域活性化起業人」制度を活用して民間企業の営業人材受入れも模索しています。村内の 民間企業では、グローバルメーカーのファインネクス様が立地し、村が行う地域活動に協力いただいています。また、あるやうむ様とNFTプラットフォームの構築等で連携しています。 産業面では米作りが中心で、農

事組合法人東和様が米や大豆、マスカットなどを手がけています。 子ども・子育て支援では、NPO 法人園むすびプロジェクト様（11 月には「年イチ園むすび」イベント等を企画）、fork toyama 様、子育て支援施設「ぶらんこ」などがあり、村外からも多くの利用者が訪れています。
資産・財産としては、京坪川河川公園（オレンジパーク）などがあります。 また現在、富山地方鉄道の問題で沿線自治体の負担金議論がありますが、越中舟橋駅は立山町・上市町・水橋方面の方が車を停めて富山市内に通勤するためのパーク＆ライドとして使われており、「舟橋村に降りて目的地に向かう」構造になっていません。線路があるだけで多額の負担金を払う状況を変えるためにも、「舟橋駅で降りてもらう理由」を作る必要があります。駅前の大規模駐車場は平日は満車ですが、土日は空いているため、このスペースの活用も考えられます。 駅併設の図書館や、本日の会場である舟橋会館の温浴施設は、朝釣り帰りの釣り人が利用するなど村外客にも親しまれています。 課題としては、議会の定数割れや、祭りなどの地域行事でも担い手不足により「役場がお金も人も出して祭りを維持している」状態があり、村民の自発的な参画が得られにくいという点が浮き彫りになっています。私からの説明は以上です。
堀井（事務局）：ありがとうございました。外部の視点を取り入れつつ、地域おこし協力隊や地域活性化起業人、そしてここに集まっていただいた皆様のようなプレイヤーをどう増やし、村民を巻き込んでいくかが大きなテーマとなります。 それでは各委員の皆様から、事前に考えていただいた事業提案のプレゼンテーションをお願いします。

4. 各委員からの事業アイデア発表
① 岡田委員：「舟橋によりみちを作る（関係人口・行きつけ田舎構想・第 2 の村民）」
岡田委員：前回の会議の後、家族で舟橋村を訪れました。私の抱いていた「村」のイメージと全く違い、富山市や立山町との境界がシームレスで、若い世代・子育て世代が多いことに驚きました。私が住む氷見市は毎年約 1,000 人規模で人口が減少しており、人口が維持・微増している舟橋村は非常にポテンシャルが高いと感じました。
今回の提案タイトルは「舟橋によりみちを作るプロジェクト」です。 目的は、「関係人口をいかに増やし、外貨を村に落としてもらうか」、そして「関係人口が村を訪れる理由（受け皿・事業）」を作ることです。 村内を巡ると、図書館や越中舟橋駅前の空きスペース、サッカー場など既存の“箱”は既に揃っています。課題は、イベント等で人が来ても「舟橋村との関わり」が定義されておらず、一過性で終わっている点です。 来年度からスタートする「ふるさと住民登録制度」を見据え、村外の人が「第 2 の村民（よりみち村民）」として継続的に関われる仕組みを作りたいと考えています。 例えば高知県日高村の「いきつけいなか」事業（人口約 4,400 人の村でいきつけいなか会員 1,300 人以上を獲得）のように、農業体験などをフックに緩やかな関係性を作り、ゆくゆくはお祭りの担い手不足解消や、地域商社を通じた経済循環・投資へと繋げていく構想です。 今年度のゴールとしては、12 月までにアクションプラン計画書をまとめ、地元の方々にプレゼンして、新年度から一緒に取り組む仲間を募る形にできればと考えています。

【質疑・コメント】（中川委員からのフィードバック）

中川委員：発表の前に、村マップの説明について１点質問と、アイデアが２点あります。まず住民意識調査で「85.5%が村に愛着を持っている」とありましたが、何に対して愛着を持っているのかが気になりました。立山連峰の景色なのか、育った学校なのか、ご近所の方など人なのか、村の制度や支援なのか。選挙の担い手不足や祭りの参加者が少ないという実態とのギャップがあるので、この「愛着の源泉」を深掘りすると事業の大きなヒントになると思います。

アイデアの１点目は、「地域活性化起業人」についてです。大手企業は全国の自治体で争奪戦になります。それより、なぜ舟橋村なのかという意味合いのある企業にアプローチする方法はいかがでしょう。また、地域活性化起業人は複数の自治体が連携して公募することも可能なので、例えば、地鉄沿線の自治体で広域連携して企業にアプローチする（沿線丸ごとプロジェクト等）のも手ではないでしょうか。 ２点目は、舟橋会館の使い方です。先ほど「朝の釣り人がお風呂に入りに来る」というお話がありましたが、会館の広くて綺麗な厨房を「魚を捌く調理場」として開放して料金を取るのはどうでしょうか。家のキッチンが魚臭くなるのを嫌がる奥様も多いですし、鱗や汗を流してお風呂に入れたら釣り人にとって最高です。月１回釣り人の宴会を開いたり、子どもが魚を見る場にしたりと、交流拠点として広げられそうです。

② 中川委員：「小ささ×ギャップPR（小さい人気キャラコラボ・巨大おにぎり・サミット構想）」

中川委員：私からのプレゼンです。舟橋村の「日本一面積が小さい」という特徴は、最大のキラーコンテンツであり唯一無二のフックです。これを活かしたＰＲ企画は、村に注目を集めるためや、住民の方が楽しく村おこしに参加するきっかけにできると思います。今回は例として、「小さいもの同士の共感PR」と「巨大なものとのギャップPR」の２つを考えました。

1. **小さいもの同士（小さい人気キャラコラボ / ミニ自治体サミット）** 今絶大な人気を誇る小さくてかわいいキャラクターとコラボできないかという提案です。通常、企業コラボには多額の費用がかかりますが、「日本一小さな村」である舟橋村なら、全国で唯一正々堂々と公式にドアノックできる大義名分があります。村の田園風景の中にキャラが隠れていたり、コラボデザインのお米袋で米を販売したりできれば、全国からファンが訪れます。 その際には「見て終わり」にならないよう、お金が落ちる仕組みまで考えるのが重要です。
2. **巨大なものとのギャップ（巨大おにぎりギネス挑戦 / 日本一大きな村・十津川村連携）** 逆に奈良県十津川村のような「日本一広い村（舟橋村の約200倍）」と連携して対比のツーリズムを作ることや、村の名物である米を活かして「ギネス記録（600kg超）を超える巨大おにぎり作り」に挑戦する企画です。

外部が勝手に作るのではなく、村民や若者を巻き込み、「なんか面白そうなことをやっている」と人が集まり、結果としてお祭りや次の地域づくりに繋がる起爆剤になればと考え

ています。

③ 大石委員：「農業×関わり続ける仕組み（泥フェス・お米オーナー制・ＺＥＲＯＣＯ/冷凍構想）」

大石委員：私は農業の分野に特化した提案です。コンセプトは「村民が自分の村に誇りを持てるビレッジづくり」です。 村の最大の強みである「米」という資源を活かし、単発のイベントで終わらせず、年間を通じて関わり続けるプログラムを設計しました。

- **春〜夏**：田植えだけでなく、田んぼを活用した「泥フェス（田んぼフェス）」や、空き家を活用した「3 日間プチ移住体験」。草刈りや水管理といった地元農家が最も負担に感じる作業を、若者や外からの関係人口（F35 等の若手コミュニティや学生）が手伝う仕組みを作ります。
- **秋〜冬**：収穫体験や、先ほど中川さんから出た「巨大おにぎり」、学生団体と連携した「お米の加工品開発コンテスト」などを実施します。
- **持続可能な仕組み（ケーススタディ：鳴子の米プロジェクト）**： 宮城県鳴子温泉で 20 年続く「お米オーナー制度」をモデルにします。買い手が 1 俵（60kg）を 24,000 円で事前予約購入し、農家に 18,000 円、運営側に 6,000 円が入る仕組みです。これにより農家の安定収入を確保し、運営側も持続可能になります。
- **村民・近隣住民へのアプローチ**： 外の人だけでなく、まずは村民自身が自分の田んぼ・米を誇れるよう、小さな区画を村民に割り当てて収穫を体験してもらうことや、隣接する富山市藤ノ木エリアの子育て世代をメインターゲットとして巻き込んでいくことを提案します。

堀井（事務局）：ありがとうございます。富山市のスターバックスが学生と連携してまちづくりを行っている事例もありますが、藤ノ木エリアのスタバに通う層や学生を舟橋村に呼び込む連携も非常に親和性がありそうですね。

④ 中林委員：「村丸ごと実験場×若者・親子（保育園留学・健康促進モデル・リーバー導入案）」

中林委員：私からは 2 つの視点で提案を作成しました。

1. **日本一小さい村 丸ごと実験場（子育て×実証実験）** 「日本一小さい村」を「日本一早くアイデアを試せる実験場」と位置づけ、村外の人に「研究員」として登録してもらう仕組みです。北海道で広がっている「保育園留学」を参考に、村内外の親子が交流するサマーキャンプを企画したり、空き家を活用したりして起業・やりたいことを形にする場を提供します。
2. **村民の土台を作るヘルスケア推進モデル（医療相談アプリ「リーバー」導入）** イベントや新しい挑戦を行う前提として、村民自身の健康や安心な暮らしが重要です。子育て世代の運動不足や、夜間・休日の子どもの体調不良時に相談先がわからないという不安に対し、茨城県の医師が開発した 24 時間医療相談・健康観察アプリ「リーバー（LEBER）」を村全体で導入することを提案します。 毎日健康観察を入力するとポ

イントが貯まり特産品と交換できる仕組み（県の「かがやきウォーク」類似）を組み合わせ、富山県のモデル事業や地域活性化起業人のネットワークを活用して村の負担を抑えつつ、村民の健康づくりと参加意識を定着させる提案です。

5. ディスカッション・今後の推進方向性の検討

（小休憩を挟み、再開）

■ 事務局からの骨子案提示：「舟橋よりみちプロジェクト」3本柱

堀井（事務局）：皆様の提案を踏まえ、事務局として今後の方向性の仮説を整理しました。 岡田委員の「舟橋よりみちプロジェクト」を全体の傘（枠組み）とし、目的を「稼ぐ力を伸ばす関係人口（よりみち村民）の創出」に置きます。その上で、中身を以下の3本柱で構成してはどうかと考えています。

1. **農業事業**（大石委員提案：泥フェス、お米オーナー制、草刈りサポート、加工品開発）
2. **実験場事業**（中林委員提案：学生・若者・親子が挑戦できる実証実験の場、fork toyamaなどとの連携）
3. **PR戦略事業**（中川委員提案：人気キャラコラボ等のドアノック、巨大おにぎり、小ささのギャップ発信）

拠点としては、村が利活用を検討している「越中舟橋駅前の空きスペース」を実験場のハブとして位置づけます。

本間（総務課長）：駅前スペースの改修費用として、国の「地域未来交付金（地域再生計画）」で本年度200万円、来年度もPR等を含めて500万円の予算計画を組んでいますので、その場所はぜひ活用していきたいです。 また、これまで専門家のアドバイザー派遣なども試しましたが、職員が多忙なため、片手間ではなくフルコミットしてくれる人材（地域おこし協力隊や地域活性化起業人など）が不可欠だと感じています。村民に対しても、ふるさと納税を含め「村にお金を寄付したり関わったりすることで、自分たちの暮らしがどう良くなるのか」という納得感のあるストーリー作りが非常に重要だと感じています。

■ 委員間の討議：リアリティとワクワク感、ターゲットの絞り込み

岡田委員：本間課長のおっしゃる通り、片手間では事業は形になりません。自分ごととして動けるプレイヤーが軸になるべきです。その点、大石さんの農業や中林さんの実験場構想は、担い手が見えておりリアリティがあります。受け皿としての関係人口・ふるさと住民登録に繋げる出口を作れば、継続的なモデルになると感じます。

中川委員：全部を盛り込みすぎると実行段階で「絵に描いた餅」になってしまう危険があります。一番リアリティがあるのは大石さんの農業事業なので、まずはそこを主軸に据えるのが成功確度が高いと思います。私のPR案はタイミングを見て投げる「飛び道具」として位置づけ、1つずつ段階を踏んで進めるのが良いと思います。

中林委員：学生が関わる上でも、ただ農作業を手伝うだけでは集まらないので、「なぜ舟橋村に関わるのか」という共感できるストーリー作りが不可欠だと感じています。学生自身がワクワクできる内容でないといけないと思いました。また、このままでは単発的なイ

ベントで終わる気がしました。そのために、大学生が学んでいることを実装できるようつなげる足し算を考えたい。

大石委員：正直に申し上げますと、自分の提案した農業プランは「できること（CAN/MUST）」ではあるものの、自分自身が心からワクワクしきれていない部分がありました。中川さんの出されたアイデアの方が圧倒的に面白い。村民自身がウキウキ・ワクワクできるエッセンスをどう組み込めるかが鍵だと思います。 例えば、先ほど中林さんの話にもあった「食と健康」に関連して、新施設に野菜等を数ヶ月間、生の鮮度のまま凍らせずに保存できる「0℃・湿度 100%（ＺＥＲＯＣＯ技術）」のような冷凍・冷蔵設備を導入し、旬が短い富山の野菜を年間通じて子育て世代に提供できるような拠点にするなど、実利と新しさを組み合わせるのも面白いのではないでしょうか。

岡田委員：「富山市藤ノ木エリアの子育て世帯・マダム層」に絞るのか、「学生」なのか、「村民」なのか、まず明確にするべきです。近隣の藤ノ木エリアの方々に直接ヒアリングしてみるのも有効だと思います。

本間（総務課長）：村の現状として、「祭りを残してほしい」という声はあっても、「実行委員としてコミットしてほしい」と頼むと人が引いてしまうという深刻な課題があります。村民に運営側の過度な負担を求めるのは難しいため、まずは「参加者（ユーザー）として楽しんでもらい、利益を享受してもらう」スタンスで割り切るのも現実的かもしれません。外から来る人たち（藤ノ木マダムや若者）が楽しんでいる姿を見て、村民も自然と混ざっていくようなアプローチが良いのではないかと思います。

6. 今後のスケジュール・次回に向けた進め方

堀井（事務局）： 本日の議論を受け、事務局にて一度全体のストーリーと企画の優先順位を整理いたします。 すべてを同時に進めるのではなく、

- **軸となる事業（農業・食・健康、駅前スペースの活用）**
- **関わるターゲット（藤ノ木エリアの親子層、学生、村民の関わりしろ）**
- **外貨獲得と関係人口（ふるさと住民登録制度への連動）** を段階的なロードマップとしてまとめます。 委員の皆様には個別にフィードバックやご意見をいただきながら、次回・12 月の第 3 回会議（最終報告・提言取りまとめ）に向けて具体的な提案書・アクションプランを策定してまいります。

7. 閉会挨拶

渡辺村長： 本日は委員の皆様から大変具体的で面白いアイデアをいただき、真剣な議論を交わすことができました。最後は少し論点が広がった部分もありましたが、事務局で方向性を定めていただき、12 月の第 3 回会議に向けてさらに深掘りしていければと思います。事務局の皆様、そして委員の皆様、引き続きよろしくお願いいたします。本日はお疲れ様でした。

一同：お疲れ様でした。（閉会）